

言葉の裏にあるメッセージを嗅ぎ取る想像力と 思いを伝えることのできる言葉を今こそ！

桐山 まきさん（病体労組）

『なぜ、人を殺してはいけないのか』

ある集会のフロア発言で、青年が言った。今どきの青年たちがよく使う言い回しの尻上がり口調で、発言の最後は疑問文のような、内容を自身で確認するための言葉のような、微妙な問いかけ型になった。

「改憲が決まれば、徴兵制が敷かれることになるのではないか。日本の子どもたちは将来戦地に赴き、殺したり殺されたりすることになるかもしれないということが現実味を帯びてきている」という発言を受けてのことだった。

青年の発言を受けてオトナたちは一瞬はっと息をのみ、次に騒然となった。‘命の重み’がここまで軽くなってしまったのか。‘説明の余地のない’‘大前提の’それに対して疑問を抱くとは、どういう育ち方をしているのか。‘教育’行政は何をやっていたのか。あなたが殺す命は、愛する誰かがいる命、父も母もいつくしみ大切に育てた命なのだと、厳しくやさしく語りかけるフロアのオトナたちが必死になった数十分だった。私はこの場にいたオトナの一人ではあったのだが、青年の疑問？にずっと引き込まれた。この青年の発言の意図は、違うところに向かっていたのではないかと考えた。

『なぜ、人を殺してはいけないのか』

この疑問は、あまりのインパクトの強さに会場がどよめき、怒りや不快感、あきれた感の嫌な空気に包まれてしまい、「つい、うっかり日常的に感じている自分の疑問を話してしまっただけのためにオトナたちをこんなに驚愕させて、シマッタ！」という態度の青年は、『だけど、世界のどこでもヒトはヒトを殺し、傷つけあっている。(上官に)殺れって言われたら、逆らえないでしょ。だって、殺らなかつたら自分が殺られるし・・・』と言い残し、これ以上は、自分の意見を語る勇気を持たなかった。

『なぜ、人を殺してはいけないのか』

殺してはいけないとされている自明の‘説明の余地のない’‘大前提の’‘命の重み’に対し、人はあまりに無力で、なぜ世界中では、貧困で、病気で、戦争でヒトが死んでいくのか。日本の中でも、過労で、看取られずに、保護を打ち切られ、置き去りにされ、孤独で毎日ヒトが亡くなっている。

この青年の時代、今は過度に競争をあおられ、中学不登校は13万人以上。勝ち負け分類され、就職はなく、親はリストラ。社会は青年たちにWELCOMEを言ってはくれない。殺してはいけない命を殺してしまうかもしれない道をわざわざ敷き、そして、自分が死ぬかもしれない戦地へ向かわせようとするオトナたちのやっていることは、子ども‘命の重み’をかけがえのないものとは見ていないというメッセージを日々送って

いるのと同じなのではないか。青年は、オトナはわからん！信用できない！とし、オトナはオトナで最近の若者は、命を粗末にしている、と呆れたりする。でも、オトナが言葉の裏にあるメッセージを嗅ぎ取る想像力を磨き、青年たちのわかる言葉を探さないと、子どもたちとともに闘うこともできない。

国民投票法案が国会に提出される。その前に存分に話し合わなければならない。わかりづらさを面倒臭がってはならない。しつこく思われても、その手を離してはならない。

その手はまだ、やわらかく暖かい。オトナから青年に歩み寄っていかなければならない。その青年が、オトナたちのメッセージを仲間に伝えてくれることを願って。



靖国神社が抱える自己矛盾を実感した実態調査

渡辺 幸彦さん（ほくと医療労組 中央書記次長）

数年前、まだ建物が大きくなる前に行ったことがあります。その日は2月11日で、旧日本軍の軍服を着たコスプレ好きの若者と昔を懐かしんで集まった老人達がいきました。

今回は4月9日でまだ桜が散らずに残っていました。参道には露天が並び、祭りの風情が満ちていました。

靖国神社には二つの顔があります。一つは他の神社同様に様々な祈願をするところです。絵馬には合格祈願、家内安全などが書かれています。もう一つは61年前にあった戦争は正しかったと主張し、戦死者を英霊としてまつる「国体護持」、「戦争賛美」をするところです。

「遊就館」は日本の戦争の歴史を展示する施設であるという体裁をとりながら、彼らの言う「大東亜戦争」の正当性を主張しています。また、戦後行われた東京裁判は不当なものであり、間違っていると主張しています。パール判事の石碑があり、碑文には「意見書の結語」が刻まれています。彼は判事の中でたった一人被告の無罪を主張したからです。

靖国神社は二つの顔を持ちながら常に揺れ動いています。政治の思惑の中で反動的な動きが強まる中で、戦争推進神社としての側面が強く押し出されています。一方で経営的には苦しいようで、神社の裏には有料駐車場があります。

以上これは案内してくれた新宿平和委員会の方からの受け売りです。靖国神社の本質を知るには、よくよく勉強しないと分からないということです。

靖国神社自身が抱える自己矛盾を感じた実態調査でした。靖国神社が他の神社と同じように心の平安を願える場になるよう願うと同時に、今の実態を広く知らせる必要性を痛感しています。